

# 佐渡市<sup>しゆくねぎ</sup>宿根本集落における 「ベトナム風路上茶屋」の展開 —地域づくりに国際性を取り入れたサービスラーニングの実践—

長坂 康代

## 1. はじめに—活動に至った経緯と3年間の活動内容

国際文化学科多文化理解コースで筆者が受け持つゼミでは、サービスラーニング活動に重点を置いている。座学で知識を得て、マイノリティの視点からフィールドワークを実践し、多文化理解教育を進めてきた。それらの活動として、新潟市北区のイスラームのモスク（宗教施設）でのパキスタン人とのボランティア活動、新発田サマーフェスティバルでの出店（インド人シェフとの共同作業）などを通して国際協働につながる地域協働を行ったことが挙げられる。また、2019年度には東京のJICA（国際協力機構）まで出向いてベトナムでの国際協力と持続可能な社会づくりを学んだりして、国際文化学科に所属するゼミ生としての学びを深めてきた。

このように段階を踏んでベトナム現地学習を計画していたが、コロナ禍で2020年夏に予定していた渡航が不可能になった。国際的な学びを重ねた学生たちが新潟の地域社会に関心を持ち、本学近くの新発田商店街界隈でインタビュー調査を行い、SNSなどで自主的に発信してきた経緯もあり、代替案として新発田周辺での活動だけでなく学生と縁ある地域に活動の幅を広げることにした。2020年当時は佐渡島出身のゼミ学生が2名いたため、佐渡市宿根本集落で地域貢献につながる活動を積極的に行いたいという熱い思いを抱くようになった。しかし、地域連携・地域活性化というと、よそ者がその地の文化を十分理解せずに地域をかき乱すことになりかねない。地域が望むことだけを優先するならば、若者が一時的なマンパワーにしかなりかねない。そこで、学生が主体的に活動することを第一にし、地域の方々のご指導と学生の発想力や行動力を大切にすることを前提とした地域連携・地域活性化活動を提案した。2020年度は新潟県「令和2年度 大学等と連携した地域活性化事業（集落・大学協働型）」の助成金を受けた。2021年度と2022年度は佐渡市「大学との域学連携事業」、本学「学長裁量経費」の助成金を得て活動している。

3年間の地域活性化活動の内容は、ベトナム風路上茶屋の開催、オリジナル商品づくり、トレッキングコースづくり、イベント開催など多様に発展した（表1）。また、宿根本で製作したものを活かし展開する活動も行ってきた（表2）。各活動は有機的に結びついているが、それらの詳細は別稿にゆずり、本稿では3年間の「ベトナム風路上茶屋」で目指した「ゆるやかなコミュニティづくり」について報告する。

表1 3年間の宿根木集落地域活性化活動の内容

2020年度	2021年度	2022年度
ベトナム風路上茶屋	ベトナム風路上茶屋	ベトナム風路上茶屋
横井戸までの清掃 (地域による働きかけで実施)	トレッキングコースづくり (横井戸までの整備、学生の自発的な取り組み)	トレッキングコースづくり (横井戸までの整備継続)
竹の利活用(テーブル、いす、イーゼル・立掛け具、カップホルダー)		竹の利活用(モルック、わなげ、水鉄砲、イーゼル)
米袋の利活用(バッグ試作)	米袋の利活用(バッグ販売)	米袋の利活用(バッグ販売)
	端材を使った商品開発 (マグネット)	端材を使った商品開発 (ストラップ)
		イベント開催
		椿の実の利活用(お手玉)
海岸清掃	海岸清掃	海岸清掃
夜番 <sup>1)</sup>	夜番	夜番

表2 宿根木以外で展開した宿根木資源の利活用

2020年度	2021年度	2022年度
リサイクル米袋バッグの縫製依頼(新発田市・マザーアース)	7月、9月、10月 リサイクル米袋バッグの販売(新発田市役所札ノ辻広場)	11月 モルックとわなげを用いた国際交流(新潟市北区・旧太郎代小学校体育館)
		12月 子ども対象。お手玉も活用した国際交流(新潟市西区・アンヌールモスク)
		1月 留学生対象。お手玉も活用した国際交流(新潟市西区・アンヌールモスク)

カッコ内は関係場所

## 2. 宿根木集落の概要と地域の組織「宿根木を愛する会」

佐渡島の中でも、地域によって文化の違いがあり、独自の地域性がある。佐渡出身のゼミ生が生まれ育った市の中心部（国仲の公家文化）と最南端の宿根木（小木の町人文化）では歴史的経緯から文化が全く異なる。佐渡を知っていると自負していた当該学生は、この細分化された文化の違いに直面して、新潟市出身の学生以上に戸惑った。

宿根木は、江戸時代中頃から明治にかけて日本海を舞台とする廻船業（北前船）の寄港地として発展した歴史ある商業集落で、小木港から南西約4kmに位置する宿根木は「小木の町人文化」形成に先駆けて、中世の頃より廻船業を営む者が居住して栄えた地域である。江戸幕府によって小木港が整備され、商業の中心が小木港へ移行すると、宿根木でも船主が先頭となって十数人の船乗りと共に、全国各地へ乗り出して商いを続けた。こうして宿根木には船主や船大工、造船技術のほか、四十物屋<sup>2)</sup>、桶屋、紺屋、鍛冶屋、石屋など多職種が集まって、千石船産業の基地として整備され繁栄していった。現宿根木の町並みは、その時代の集落形態を保持している。たとえば、建物の外壁に船板や船釘を使ったものや、千石船の面影をしのぶことができる。また、大浜と呼ばれる宿根木海岸は、かつて千石船の荷揚げ場や造船場で、北海道や大阪へ通じる佐渡の玄関口だった。こうした宿根木集落の特徴は、家屋の密集性にあらわれている。1953年ごろから宿根木を来訪していた民俗学者の宮本常一によって、この船の資材や船大工の技術を用いた建築の街並み保存が提唱され、のちに国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された（図1）。

しかし、これだけの歴史的文化的資源を保持しながらも、宿根木集落も高齢化による諸問題を抱えている。宿根木の人口は、国勢調査（2015年）の資料によれば154人（男性70、女性84）である。内訳は、15歳未満8人（男性6、女性2）、就労人口にあたる15歳～65歳67人（男性32、女性35）、65歳以上79人（男性32、女性47）、75歳以上48人（男性18、女性30）で、少子高齢化が目立つ。また、就業別では、農業・林業33人、建設業5人、製造業4人、運輸業・郵便業3人、卸売業・小売業9人、学術研究、専門・技術サービス業1人、宿泊業・飲食サービス業13人、生活関連サービス業・娯楽業2人、教育・学習支援業3人、医療・福祉12人、複合サービス事業3人、サービス業（他に分類されないもの）3人、公務（他に分類されるものを除く）3人となっている。次世代を担う若者には、集落活動の担い手、文化・芸能の継承、豊富な地域資源の活用など、多くの課題に向き合ってもらいたいという思いが上位世代にはある。

この3年間、学生たちが宿根木での活動で全面的に世話になったのは、地域住民が任意で立ち上げた「宿根木を愛する会」（以下、愛する会）である。1991年に宿根木が重要伝統的建造物群保存地区に認定されてから、愛する会は、宿根木憲章の基本理念「売らない・貸さない・壊さない」に則って空き家管理、建造物保護、活用、移住促進等すること

を目的として、宿根木の環境維持管理活動を行ってきた。2022年5月には一般法人になり、これまでの保存活動から「繋ぐ活動」として、「保存地区の観光地化に抗うべく、宿根木憲章の基本理念に則り、住まうべき集落として、より良い住環境整備をし、若い世代に地域の農業・漁業・食品加工業などを担っていただきたい」と新たなスタートをきり、次世代が当たり前の日常生活を送る宿根木集落の在り方を目指して、日々地域づくりに取り組んでいる。

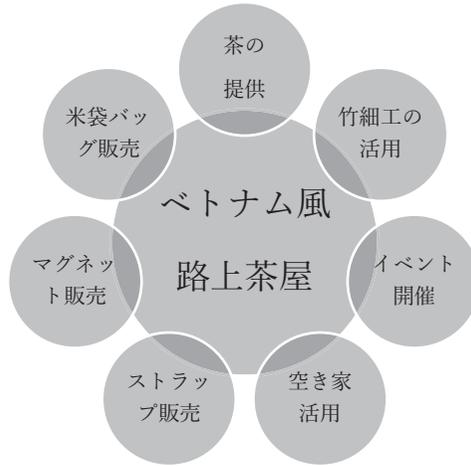
2020年7月、宿根木での初回の打ち合わせでは、愛する会側から「特産品のブランド化の提案や空き家の活用、ただモノを売るのではなく宿根木でしかできない体験を生み出すことができないか」といった提案をうけた。新潟県からは「活性化とは何かを明確にすることや、スケジュールに沿った具体的な目標の設定をすること」など、活動するにあたっての助言を受けた。これら地域や行政の思いや働きかけは、3年間の宿根木活動の方向性を決定づけることになった。そこで、ベトナム風路上茶屋がもつ機能を最大限生かして、茶屋を基軸に地域づくりを展開していくことにした。図2は、ベトナム風路上茶屋をめぐる行ってきた諸活動をあらわしている。

図1 宿根木（谷間）マップ



宿根木観光案内所で配布

図2 ベトナム風路上茶屋を基盤とするサービスラーニング



### 3. ワークショップ「ベトナム風路上茶屋」の開催

初年度の参加は3年生のみだが、2年目以降は前年度に参加した学生には初めて宿根木に関わる学生のサポート役として、活動だけでなく愛する会を中心とする地域の方々とのコミュニケーションを円滑に進める役割も果たしてもらった。2022年度は小木出身の2年生にも参加してもらって引継ぎを意識した。モノの継続もしている。2022年度にイーゼルを新たに製作したが、初年度に製作したテーブルやイス、カップホルダー、看板を掲げるためのイーゼルは路上茶屋で毎回使用している(表3)。2022年度のイベント「宿根木フェスタ」は、愛する会のご厚意で学生との共催にしてもらい、宿根木の資源を活用した子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しめる遊びの場を設けるとともに、宿根木公会堂前にある、学生が共同生活する場「あすなる学舎」前の空き家の敷地でも路上茶屋を開いた。これによって、宿根木観光のひとつ「三角家」を見ながらお茶を飲む新たなスポットができた。

表3 宿根木でのベトナム風路上茶屋

	2020年度	2021年度	2022年度
開催場所	よしかわ屋前(写真1) 宿根木海岸沿い(写真2)	よしかわ屋前(写真3、4)	よしかわ屋前(写真5、6) 宿根木公会堂前 空き家敷地
開催時期	10月(2日間)	9月(2日間)	9月(1日間)

カッコ内は日数	11月（5日間）	11月（5日間）	11月（2日間）イベント「宿根木フェスタ」として開催
茶の無料提供	佐渡番茶	佐渡番茶	佐渡番茶 ベトナム蓮茶
宿根木の資源 利活用（竹）	テーブル、イス、 イーゼル、カップホル ダー（以上、製作・ 活用）	テーブル、イス、 イーゼル、カップホル ダー（以上、活用）	テーブル、イス、 イーゼル、カップホル ダー（以上、活用）、 新イーゼル（製作・ 活用）
			モルック、わなげの 輪、水でっぼう
宿根木の資源 利活用（焼き印）	カップホルダー	マグネット	ストラップ
宿根木の資源 利活用（米袋）	試作、縫製（新発田 市内の障がい者雇用 施設に委託して農福 連携）	販売（よしかわ屋前、 新発田市役所）	販売（よしかわ屋前）
参加学生の人数 カッコ内は学年別数	11名（3年11名）	10名（3年6名、4 年4名）	11名（2年1名、3 年7名、4年3名）
宿根木の資源 利活用（樺の実）			お手玉

### 3-1. 宿根木版ベトナム風路上茶屋の着想と開催・展開の目的

宿根木での主たる活動である路上茶屋について述べておきたい。ベトナムの路上茶屋とは、首都ハノイのどこにでもみられる路上の茶店である。歩道で店を開くので、壁や屋根がなく開かれた空間である。茶屋は、元手がかからず必ず収入になる仕事である。しかし、毎日同じ場所で店を開く固定茶屋の場合は、地域住民が地域のために開くという特徴がある<sup>3)</sup>。そして茶屋を通して、民衆独自のネットワークが築かれている。客は職業や階層を限定しない、土地の者も移動者も利用する。ここに茶屋を核としたゆるやかに地域を超える地域社会ネットワークがはられ、茶屋をめぐる社会性を創り上げている〔長坂2010:21〕。茶屋は、茶を飲むだけではなく地域住民の交流の場であり、カフェよりも金銭的にも安く敷居の低い家代わりの機能や、茶以外の嗜好品が置いてある口直し機能など

複合的な機能をもつ空間である。また、多様な階層、多様な職業、多様な世代、多様な民族が交錯する、誰もが気軽に利用できることも魅力である。それを宿根木集落に置き換えた時、大浜と呼ばれる広場・宿根木海岸から水平線が見える開放的な雰囲気と、観光客が来訪する多様な人々が交わる場だからこそ、ハノイの茶屋がもつ複合的で重層的な機能を活かせると想定した。ベトナムでは茶を格安で売っているため、当初は宿根木でも同じように金額も設定することも検討したが、宿根木では佐渡番茶を無料提供とした。佐渡番茶についても、佐渡出身の学生2名が佐渡市内のJAや農家を訪問して聞き取りをし、地元佐渡の歴史や文化の理解に努めた。当該学生が当たり前のように食べていた佐渡・両津の茶粥文化にも触れ、気づきの多い経験になった。

ハノイでの路上茶屋は、コミュニティ社会への登竜門の場にもなっている。茶屋の店主、一日に何度も茶屋を利用する出稼ぎ労働者、従業員、店主が、地域のコミュニティ意識を共有することで、地域社会の安全性を掌る、フィルターの役割も果たしている [長坂2008:94, 2010:21]。この重層的な機能をもつハノイの路上茶屋は、廻船業のほか造船基地として発展した多職業・多階層の歴史と、「旅のもん」と称されるよそ者との交流文化がある宿根木に適していると判断した。以上から、いずれ地域住民が茶屋の店主となることを理想として掲げ、まずは学生自らが、宿根木集落（谷間）の入口で、町並み案内所もある駐車場に面した、体験館1階の料理屋・よしかわ屋前と宿根木海岸の2か所で路上茶屋をワークショップとして開催、運営することにした。

学生たちに徹底したのは、「私たちはよそから来た新参者である」という認識をもつということである。同じ佐渡でも文化が異なる。私たちが宿根木集落で学ぶことを大前提にしつつも、私たちが関わるというのは、新参者がそこでの生活者の空間に土足で踏み込んでいくことでもある。私たちが宿根木を変えるのではなく、宿根木の雰囲気を壊さず、なじむことを第一に考えるとした。私の人類学の言葉では「寄り添う」という。また、ゼミの時間を活用して、宿根木の歴史や現状に関する諸論文や、宿根木での他大学の活動報告などを読んで地域への理解を深め、茶屋のもつ機能や宿根木での目的についても理解を促進させた。こうして、ベトナム風路上茶屋という、ゆるやかなコミュニケーションの場を設けることにより、地域住民間や地域住民と観光客の間でのつながりを増やすことを目指した。学生は地域住民や観光客をつなぐパイプ役になることを意識して活動に臨んだが、本来、ベトナムの路上茶屋では、対話だけでなく飲食（持ち込み自由）ができ、店主が不在の場合はその場にいる誰かがお茶を提供するという自由な雰囲気がある。そのような誰もが気楽に気軽にその場にいることができる場所をつくり出そうと試みた。「ゆるやかな」と形容するのは、あまりタイトな社会関係の成立を目指すとは持続しないことがよくあるからである。気軽な地域社会人に多くの人になろうということである。そこで、学生自ら宿

で作った昼ご飯を持ち込んだり、店主になる学生が頻繁に入れ替わって訪問客に茶を提供したりして、学生が自由な雰囲気をつくりだすことを心がけるようにした。

以下、初年度の活動にゼミ長として参加した学生 A の文章である。ここに、学生の茶屋開催への意気込みと、コミュニケーションを図るための「戦略」がみてとれる。

本活動のモデルとなったベトナム北部では、お茶が最もポピュラーな飲み物であり、飲み物としてだけでなく、飲むという文化・お茶を通してコミュニケーションをとる文化が強く根付いている。特にハノイの旧市街地では路上で茶店を開き、安い価格でお茶や嗜好品を販売し、地域の人が地域のためにコミュニケーションをとることのサポートとしてお茶屋を開いているという背景がある。お茶の価格が安いことや、煙草を箱売りではなく、ばら売りしたり水タバコの道具やライター道具を貸したりしているのは、あくまでコミュニケーションをとるうえでの補助道具といった位置付けだからだ。

普段の生活の中や仕事にお茶屋で一休みといった流れが、人々の生活に溶け込み定着しているため、多くの人が集まってくる。そのため店主は、仕事をリタイヤしたのち茶屋を営んで地域住民とコミュニケーションを図ることを生きがいにしていたり、茶屋を本業とは別にダブルワークとして選んだりする。茶屋の店主にとって地域コミュニティへの積極的な参加に繋がるのである。

また、ハノイでは固定の茶屋はその地域在住の人しか開けない。つまり、「地域の人間が地域のために開く」という特徴があるということである。そして、その茶屋を通して民衆独自のネットワーク（出稼ぎ労働者の身元保証や仕事の紹介・休憩所としての機能やコミュニケーションを取る場としての役割）が構築されている。いわば井戸端会議の“井戸端”のような結節機関だ。身元保証などの機能は必要ないとしても、人を紹介することや、仕事の紹介といった部分を見れば有用な機能であることが分かる。

そういった側面も踏まえて、路上茶屋を開くにあたり以下の目標を掲げた。

#### ○地域住民に向けて

- ・家からあまりで出なくなった高齢者や、体が悪く地域の集まりに出たくても出られなくなっていた人などをお茶屋という気軽さで外へ誘いたい。
- ・気を張らなくてよい“ゆるいコミュニティ空間”の創造を目指したい。
- ・路上茶屋特有の高さの低い椅子に座って時間を過ごすことで、普段とは違った故郷の景色を見てもらいたい。

#### ○観光客、移住希望者に向けて

- ・気軽にコミュニケーションが取れるようなきっかけをつくることで、移住に向けたハードルを下げたい。（地域行事に参加することの難しさ・ゼロからの人間関係というハー

ドル)

- ・高さの低い椅子に座ることで、パンフレットには載っていない宿根木地区の景色や雰囲気を感じてほしい。
- ・宿根木の魅力は「都会のわずらわしさを癒すこと」、「地域の大切なものとは？わずらわしさととは？」町並みや雰囲気か？求められているのは都会では失われつつある何気ないコミュニケーションではないか。優しさあふれる人付き合い・ほっこりできる優しさ・都会では味わえないほっこりできる「何気ないコミュニケーション」が求められているのではないか。それを実現するためにお茶屋を起点にして、地域住民とコミュニケーションを取ってほしい。

これらの目標を基に、宿根木地区で路上茶屋を開き、薄れつつある「地域住民同士の交流」・新たな風として「地域住民と住民以外の交流」を図るきっかけになるよう活動を組むこととした。



写真1 路上茶屋 (2020.10)



写真2 路上茶屋 (2020.10)



写真3 路上茶屋 (2021.9)



写真4 路上茶屋 (2021.11)



写真5 路上茶屋 (2022.9)



写真6 路上茶屋 (2022.11)

### 3-2. ベトナム風路上茶屋をめぐるサービスラーニングの成果

学生が実際に宿根木に出向き、そこでさまざまな経験をし、地域社会にも自分にもフィードバックするサービスラーニングだが、このベトナム風路上茶屋の開催を通して感じた学生の振り返りの一部をここに記すことにする。

2020年度に活動した学生Bにとって、路上茶屋は未知の経験で緊張感が高かった。「宿根木に住われる方々は温かい方が非常に多い。例えば、すれ違った際にご挨拶をした時でも、挨拶を返してくださる方の温度が観光客の方と全く異なるのである。声のトーンや表情などが非常に柔らかく、温もりを感じられる。地元の方から「今日の夕日は綺麗になるよ」と教えていただきながら一緒に写真を撮った時間は、まさに宿根木の方々が持つ雰囲気象徴していた。お子さんや犬を連れられた方と我々が同じ空間に居ながら思い思いの方と言葉を交わす場面や、地元の方が集まるとどなたでもすぐに会話に花が咲き、その場に我々も居させていただけただけの体験からは、地域住民同士の交流が盛んであること、そういったコミュニティに我々も交え参加させてくださる、言わば「敷居の低さ」が非常に印象的だった。それらを踏まえると、今回ワークショップで取り入れさせていただいたベトナムのお茶屋の文化は、ベトナムのお茶屋そのものを体験したことのない私にとっても、宿根木の方々が持つ雰囲気に自然に馴染むものだったのではないかと容易に想像できる。「ゆるく」社会に開かれたお茶屋という空間は、気楽に立ち寄れる地域交流の場を展開し、地域の方、観光客の方、我々、3つのどの立場から見ても繋がりや生まれており、社会的な交流を可能にした。お茶屋はまず言葉を交わすことに意味があり、中にはその日の天気やどこから来られたのか、といった話から、ご自身の娘さんの話までして下さった観光客の方もいらっした。」

学生Bはワークショップとして行った茶屋開催の意図を把握しつつも、次のように反

省している。「お茶屋を展開した際の私の課題としては、コミュニケーション能力が不足していたことが挙げられる。椅子に座ってもらい、言葉を交わしながらゆっくりしていただくことが目的であるのに、話を切り出す、話を広げることが私にとって難しかったため、恐れずに言葉を発することや、普段から話題を蓄えておく必要があると感じた。また我々がお茶屋を展開することで宿根木の雰囲気は損なってはならないため、最初のコンタクトの取り方にも注意が必要である。押しすぎると商売になってしまい、引きすぎると我々の意図が伝えられないため、どなたに話しかけるかといった見極めと、どこまで踏み込んで話をするかといったバランスを取ることにしても苦労を要した。」

茶屋を引き継いだ佐渡（市の中心部・国仲文化）出身の学生Cは、次のように回顧している。「私は宿根木での活動を通して、今まで普通に生活しているだけでは気づけなかった佐渡の魅力、宿根木の方々の温かさを知れた。茶屋は通りすがりに見ている気になってはいたが、立ち寄っていなかったというおばあちゃんが来てくれたので、茶屋を通して地域コミュニティの場をつくるという目的の達成や、地元の方から少しずつ受け入れられている実感が湧いた。」

2年間（2021年度・2022年度）関わった学生Dは、ベトナム風路上茶屋についてこのように分析している。「最初は来ていただいた方にどのように話しかければいいのか分からなかったが、今日は観光で来られたんですか？といったように何気ない一言から徐々に話を広げることができるようになり、最終的に緊張せずに話すことができた。私は自分から会話をするのが苦手だったが、この経験のおかげでそれを克服できたように思う。このことは就職活動にも役立てることができた。新型コロナウイルスの影響により人と話す機会が少なくなっている中でたくさんの人と話をすることができ、コミュニケーションを取ることの大切さを改めて感じることもできた。」

学生たちの文章から、初めて会った人との対話や世代を超えた人とのコミュニケーションを図ることの難しさを実感するとともに、他者の些細な言動や行動に喜びを感じ、受け止める姿勢がみられる。また、自己分析して自分の課題を明らかにする姿勢も認められる。

#### 4. まとめ—国際性を取り入れたサービスラーニングの実践

2020年度から3年間、伝統的文化的価値を保持する佐渡市宿根木集落にて幅広く地域づくり活動をしてきた。本稿は、宿根木でそれを開催するに至った経緯から開催・展開までの活動記録である。

学生たちは、宿根木の歴史的建造物のなかにある一軒家で3食自炊する慣れない共同生活をし、時に差し入れしてもらい、地域に支えてもらっていることを実感しながら地域連携・地域活性化に関する学びを深めてきた。宿根木という歴史的に他者（よそ者、旅のも

ん)との交流や他者に対する寛容性ある地域だからこそ、国際的な要素をもつベトナム風路上茶屋の機能が活きる。そして、宿根木の地域住民や観光で訪れるいわば一見さんであっても、学生は他者とコミュニケーションを図る。地域の方々とも自然体で交流できる。それが、学生の社会性を育成するのだと教員も学生自身も気づかされる。

地域づくりというと、とにかく受け入れ地域側の要望に沿って学生が活動しがちである。しかし、宿根木集落の地域性を理解し、ベトナム風路上茶屋という海外文化を新たな要素を取り入れ、地域独自のコミュニティづくりの場を設けたことは、地域にとっても学生にとっても有益であったといえる。活動3年目で路上茶屋を空き家の敷地で開くことができたのは、愛する会が掲げる「住まうべき集落」の課題として挙げる「空き家をいかに活用するか」という実践にもつながった。これについては今後別稿で検証するが、いずれ路上茶屋の定着化をはかり、空き家の一部を活用した茶屋を設けることができれば、日常生活と幅広い交流を兼ねた、宿根木ならではの独創的な空間ができるのではないかと考えている。今後も周りの協力を得ながら活動を継続・展開させつつ、ベトナム風路上茶屋を基盤にした多岐にわたる活動を検証して、新たな試みとしての、宿根木におけるサービスラーニングの在り方を探っていきたい。

## 謝辞

宿根木集落での一連のサービスラーニング活動は、愛する会の濱田嘉夫会長をはじめとする関係者の皆様、宿根木集落の皆様、そして、活動を全面的に支援してくれた新潟県地域政策課および佐渡市地域づくり課の皆様のご理解とご協力によって遂行することができた。この場を借りてお礼を申し上げたい。また、学長裁量経費の一部で学生教育の支援をしてくれた山田耕太学長にも感謝の意を表したい。

## 参考文献

伊藤智樹 2019 「新潟県佐渡市宿根木における町並み保存の現状と課題」『早稲田大学大学院教育学研究所紀要』27-1、25-35.

長坂康代 2008 「経済開放後の都市ハノイにおける茶生活資源とコーヒー観光資源」『食生活科学・文化及び環境に関する研究助成研究紀要』アサヒビール学術振興財団 23、94-100.

長坂康代 2010 「路上茶屋からみたベトナム都市民衆のコミュニティ形成—首都ハノイ・旧市街のハンホーム通りを中心に—」『食生活研究』Vol.30、No.6.9-22.

宮崎幸江 2022 「サービスラーニングによる地域貢献—正課カリキュラム化までの経緯と課題」『上智大学短期大学部紀要』43 69-90.

<http://shukunegi.com/about/> 2023 年 2 月 8 日閲覧

<http://shukunegi.com/topics/news/5680/> 2023 年 2 月 8 日閲覧

<https://area.kyotanishokai.co.jp/%e4%bd%90%e6%b8%a1%e5%b8%82%e5%ae%bf%e6%a0%b9%e6%9c%a8/> 2023 年 2 月 8 日閲覧 (2015 年国勢調査に基づく宿根木人口、職業などの資料)

- 
- 1) 夜番（やばん）は火の用心である。現在は 22 時頃を目安に宿根木集落（町並み保存の谷間地区）を巡回する。
  - 2) 四十物（あいのもの）は、鮮魚と塩漬け加工品の間にある魚で、サンマやアジの開き、カマス、カレイ、ゆがいたイカ、キスの浜焼きなど干物を指す。
  - 3) 固定茶屋に対して、茶屋を開く空間がない手狭な場所（市場や歩道の狭い通り）には移動茶屋が出没する。ニッチ産業で、出稼ぎ労働者が行っている。